

報 文

現代の墨流し染 —現代の名工 菌部正典の技に注目して—

青 木 美保子*

Modern Suminagashizome:
Focusing on skills of Mr. Masanori Sonobe, a contemporary master craftman

Mihoko Aoki

This paper focuses on modern Suminagashizome, a kind of marbling.

I have been studying the modernization of Suminagashizome in Kyoto. I have found that Suminagashizome has been continually practiced since the Meiji era to the present, due to improved methods in passing down traditional techniques. I will explore these improved methods further in this paper.

Modern Suminagashizome was created with the great skills of Mr. Masanori Sonobe, a contemporary master craftsman, and his flexible thinking and advanced technology. Mr. Masanori Sonobe created rich variations of modern Suminagashizome by using the traditional techniques of Suminagashizome and the similar techniques of Norinagashizome (a derivative of Suminagashizome) with high-performance dye.

はじめに

筆者は、これまで、京都における墨流し染の近代化について研究し、明治期から現代まで、この墨流し染が、改良を伴う技術の伝承によって続いていること、そして、この墨流し染に関わった人物達の関係性を明らかにした¹。

そこで、本稿では、この研究結果を踏まえた上で、現代の墨流し染の技法に注目し、その技法を分析することで、この染色技術が、どのように伝統を伝承し、どのような変化を遂げ現代に至っているのかを明らかにしたい。

論考に先立って行った調査としては、墨流し染の第一人者である現代の名工菌部正典氏の協力を得て、現代の墨流し染の工程を写真および動画で撮影するとともに菌部氏の技術を示す見本裂の撮

影を行った。

論考の流れとしては、まず第1章で、これまでの研究で明らかにした明治期から現代までの墨流し染の変遷について簡単に辿り、菌部氏の墨流し染の位置づけを行ったうえで、第2章では、菌部氏の墨流し染の工程を分析する。さらに、第3章では、菌部氏が考案した模様を示す見本裂を分類することで、その技法と模様の関係を分析する。以上の分析を踏まえ、第4章で菌部氏の創り出す現代の墨流し染の特徴を考察する。

以上の手順によって、先達の技の伝承とそこから新たに創造される技によって進展する伝統の染織工芸の姿を浮き彫りにしたい。

* 本学准教授

1. 京都の墨流し染の変遷と現在

京都における伝統の染色技法である墨流し染は、明治期の八木徳太郎にはじまる。八木徳太郎は、文化6（1809）年に美濃国より移住した八木義助によつてはじめられた墨流し業を継ぐ八木家の3代目である。義助も、その後を継いだ娘、2代目のもよ子も、短冊や扇面など紙に墨流しを施す職人であったが、その技術を布にも染められるように改良したのが徳太郎である。明治30年、徳太郎は、小幅縮緬および羽二重等一反物を染色する技術を開発する。その後、京都高等工芸学校（現：京都工芸繊維大学）色染科教授の鶴巻鶴一は、八木徳太郎の墨流し染の技法をいかしつづつ、染料およびその定着に関して技術改良し特許を取得、大正2年にはこの技術を「波紋染」として論文発表する。さらにその後、鶴巻の教え子の亀井光三郎が、この墨流し染の技法をもとに、「改良流し染」と称する染色技術を考案し、大正11年、特許を取得する。改良流し染は泥状の色糊を用いた染色技法で、後に「糊流し染」と称される。この技術を、友禅染の老舗千總の下請けをしていた日比野治三郎が譲りうけ、さらに研究を重ねて「マドレー染」と称した糊流し染の商品を開発する。

この墨流し染の染色技法の変遷の延長上に、現代の名工として活躍する菌部正典氏が創り出す現代の墨流し染がある。

株式会社 菌部染工代表取締役社長の菌部正典氏は、昭和13年、三重県生まれ。昭和31年、伝統工芸技術功労賞受賞者の染色工芸作家小倉好三氏に師事し、小倉氏が考案し「流線流し」と命名した糊流し染の技術を小倉氏のもとで習得する。その技術を極めた菌部氏は、昭和42年に独立し、昭和45年に株式会社 菌部染工を設立する。糊流し染の技術に加え、ほかしの染色技術、手描き彩色の技術も極めて、菌部氏の染色の世界は広がっていった。そして、昭和50年頃、菌部氏は、さらなる技術改革に挑戦し始める。それは、約16mの水槽で、墨流し染の技術をもって、一反を一回で染める技法への取り組みであった。10年ほどの年月をかけ、試行錯誤の末、平成元年、菌部氏は、独自の墨流し染技法を完成した。

かつて、墨流し染は、滴下した墨が水に溶ける

前に素早く染色する必要があった。そのため、長い水槽を作って墨流し染の反物の制作に挑戦した職人もいたが、成功には至らなかった²。

そのような状況のなか、先述の八木徳太郎は、一反を何回かに分けて染色し、その際、繋ぎ目を目立たなくするために、継ぎ目に流線状の型紙を貼り付けて染色する技術を考案した³。ここにも、試行錯誤の末、新たな技術を開発した職人の機知を見ることができる。

そして、現在、菌部氏の墨流し染は、16mの水槽で、顔料を用い、一反を一気に染めることができる。この墨流し染に使用される顔料は、株式会社田中直染料店が、菌部氏の発案をもとに開発したもので、水面で拡散しない、色糊の染色では欠かせない工程である蒸しが必要など高機能なものである。菌部氏は、この顔料が完成するまでに田中直染料店の技術者とともに、定着性や堅牢性などの精度を上げるための試行錯誤を重ねたという。この顔料の発案の背景について菌部氏は「道にできた水たまりに車のガソリンが流れているのを見たときに思ったんです。その油は、いつまでも解けないで浮いている。こんな染料があったらいいのになあと考えたんです」と語る。この高機能な顔料は、染色業者と染料業者の二人三脚でできあがった顔料だったのである。

2. 現代の墨流し染の工程

以下、菌部氏の墨流し染の基本工程である。

①水槽に水をはり、水の比重を重くするための糊剤を配合する。糊剤の配合の割合は、描かれる模様の技法に合わせ、必要な粘度を出すためにその都度調整される。②エアブラシ型の器具を用いて顔料を水面に滴下していく。顔料は、墨を思わせる黒以外にも、基となる顔料の色の組み合わせでどんな色でも創り出すことができ、その顔料は水面では混ざり合うことはない（図1）。③水の表面に浮いている顔料を、道具を用いて流動させ模様を創る。この道具も、菌部氏自らが考案したもので、模様表現に合わせ、何種類もの道具が使分けられる。同じ調子で一反の模様を整えていく、修正のきかない模様表現だけに、緊張した作業が続く（図2）。④伸子張りした白生地を水

槽のできあがった模様の上に乗せる（図3）。⑤水槽の表面の模様は、一方の端からもう一方の端まで、水面を走るように、生地に吸収される。それは一瞬のことで、見ていて息をのむような感動をおぼえる瞬間の作業である（図4）。⑥並んで設置してあるもう一つの水槽で、すぐに水洗いした後、乾燥してできあがる。



図1

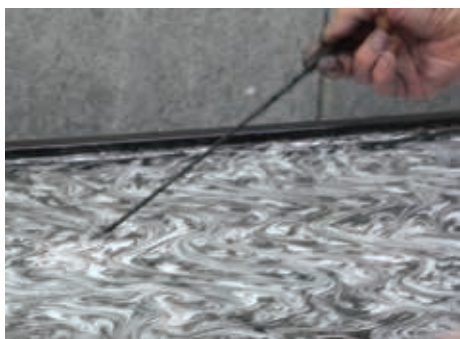


図2

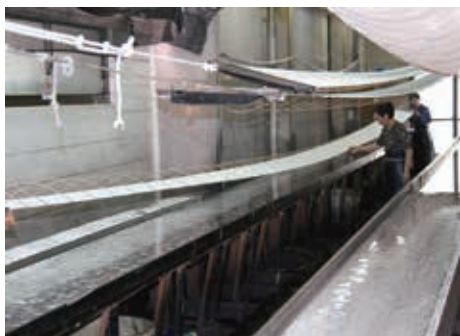


図3



図4

3. 模様と技術

以下、菌部氏の制作した作品および見本裂の模様を技法の傾向によって3つに分類し、菌部氏が命名したそれぞれの模様について分析し、その一例を図で示す。

3-1. 古法墨流し染の流れを汲む模様

・さざ波模様

串で大きな曲線を創り、そこにエアブラシ型器具を使って空気をあてることで細かい波線を創る。

図5はの油分を含む溶剤によって作られる白場を効果的に配した多色配色。

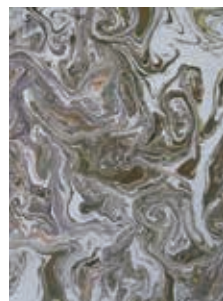


図5 多色配色のさざ波模様

・雲模様

濃淡の顔料でグラデーションをつくり、エアブラシ型器具を使って空気をあてることで顔料の円形を崩し空に漂う雲を表現する。

図6は、ハトバ色の顔料の濃淡。

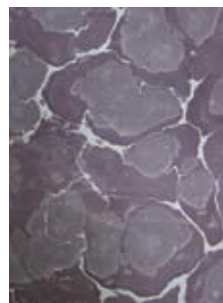


図6 ハトバ色の雲模様

・大理石模様

顔料と白場用の溶剤を滴下し、エアブラシ型器具を使って空気をあてることで模様を整える。

図7は、効果的な少量の黄色の差し色が特徴。



図7 黄色の差し色の大理石模様

・木目模様

黒顔料と白場用の溶剤を滴下し、エアブラシ型器具を使って空気をあてることで模様を整える。

図8は年輪がつくりだす板目そのまゝを表現した模様。



図8 板目の木目模様

以上、古法墨流し染の流れを汲む模様は、エアーあるいは串のような簡易な道具が用いられており、細かく繊細な模様が多い。このほか、大小の水玉から構成される水玉模様、白場を網目状にめぐらした網目模様などがある。

3-2. 糊流し染の流れを汲む模様

・かすみ模様

串や羽根を用いて顔料を流動させ、緩やかな曲線を複雑に入り組ませる。かすみの方向によって横かすみ模様、縦かすみ模様となる。

図9は斜めかすみ模様。



図9 多色配色の斜めかすみ模様

・羽根模様

串を並行に並べた道具で針状のとがった線をつくり、ヨーロッパのマープリングに似た模様を表現する。

図10はあえてモノトーンで表現することで、墨流しの持つ和の要素を添えた模様。



図10 モノトーンの羽根模様

・花模様

串で渦をつくり、花模様を表現する。隣り合う渦は、渦から広がる緩やかな曲線でつながりをもち糊流しの特徴を示す。

図11は、花柄を規則的に配した模様。



図11 規則的な花柄模様

・ずらし模様

紙で水面を一部覆って模様を描き、その紙を引き剥くことで模様を崩し横筋模様を添える。

図12は、多色配色で右から左へ模様がずらされている。



図12 多色のずらし模様

・矢絰模様

串を並行に並べた道具を上下に走らせることで、規則的な矢絰模様を表現する。

図13は、黒顔料の濃淡が混ざりあった複雑な矢絰模様。



図13 濃淡が混ざり合う矢絰模様

以上、糊流し染の流れを汲む模様は、特殊な道具が多用され、比較的、鋭い線の表現が多く、総じて大胆な模様である。このほか、羽根模様を応じた大波模様、模様の配置を工夫することで縦横の線の要素を表現した格子模様などがある。

3-3. 組み合わせ図案

・伝統の墨流し染技法の組み合わせ

かつて行われていた糊防染に匹敵する粘着力のある防染フィルムを使用し、一反に複数の墨流し染を混在させる方法がある（図14）。この技法は、一種類の技法を施すごとにフィルムを張り直す作業を伴う。フィルムを用いて防染をすることで図案のバリエーションは無限に広がる。

図15は、9種類の技法によって絵羽模様が描かれている。図16のように一つ一つは菌部氏の定番の墨流し染技法であるが、図17のようにあらかじめ描いたガイドラインに合わせ防染フィルムを貼る作業を施した後にひとつの模様を染め、それを模様ごとに繰り返す。伝統の墨流し染を組み合わせることによって、豪華で品格のある模様を染め出した逸品の訪問着である。



図14 4種類の墨流し染で構成された着尺模様



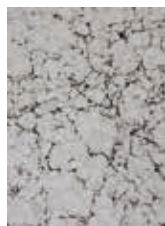
花柄模様（濃）



かすみ模様（濃）



さざ波模様



大理石模様



立シケ模様



羽根模様



横かすみ模様



花柄模様（淡）



かすみ模様（淡）

図16 図15の訪問着の部分（9種類の墨流し染）



図15 9種類の墨流し染で構成された訪問着



図17 模様に合わせて防染フィルムを貼り、残った部分を染める。

・墨流し染と他の染色技法との組み合わせ

図18のように、墨流し染と手描き友禅を組み合わせたたり、墨流し染の上にぼかし染めを施したりすることによっても豪華で華やかな逸品となる。



図18 墨流し染を施した後、手描きで木立を表現した訪問着

4. 菌部氏の創り出す現代の墨流し染の特徴

現代の墨流し染技法は、菌部氏が、古法墨流し染を時代に合わせ改良し、顔料や器具などにおいて最新の技術を取り入れるため試行錯誤しながら模索して確立した技法であった。模索の結果、菌部氏は、水槽、器具、道具すべてを自らが考案し、独自の墨流し染技法を創り上げた。そして、現代の墨流し染に必須の高機能をもつ染料の開発は、菌部氏の発案と試作を繰り返す段階での全面的な協力によって生まれたものであった。その機能を存分に生かした菌部氏の創作活動によって豊富なバリエーションの現代の墨流し染は生み出されているのである。

菌部氏は、かつて「流線流し」の開発者小倉氏のもとで身に付けた糊流し染の技術に日々研鑽を重ねることで磨きをかけた。その技術が、現在の菌部氏の墨流し染の模様の独自性の根底にある。糊流し染の流れを汲む模様は、水に加える糊の配合の調整により、顔料の流動性をおさえ、さまざまな器具を用いて規則性を持たせた模様表現であり、この糊流し染の技術を導入することで、斬新な現代の墨流し染が創作されているのである。

おわりに

現在も、菌部氏は、自ら創り上げた現代の墨流し染の技法と柔軟な発想をもって、次々に新たな模様を創作している。その模様開発はとどまるところを知らない。さらには、ランプシェードやハンドバックなど、現代の需要に合わせた新たな商品開発にも取り組んでいる。この同じところに留まらず常に挑戦し続ける姿勢があつてこそ、伝統の染色技法を将来につなげることができる。そして、こうした時代の需要に合わせ、科学技術の進化を取り込みながら変化する伝統工芸こそが、長い年月途切れることのない伝統工芸のあるべき姿なのではないだろうか。

なお、本稿では、現代の墨流し染が、古法墨流し染と糊流し染の技法の流れを汲むものであること、そしてその伝統の技法が、科学技術の発展と技術者の技術の研鑽によって進化していることを示すにとどまった。次の機会に、古法墨流し染と、そこから派生した糊流し染、そして現代の墨流し染、この技術を詳細に比較検討し、墨流し染の技術発達史をまとめることとしたい。

謝辞

本研究に際しましては、菌部正典氏より全面的なご協力を賜りました。末筆ながら心より御礼申し上げます。

本研究は、京都女子大学研究助成（平成25年度採択）および、文部科学省 共同利用・共同研究拠点 立命館大学アート・リサーチセンター 日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点の助成（平成26年度採択）を受けて行ったものです。

註

- 1 青木美保子「京都における染織工芸の近代化—古法「墨流し」の改良を中心に—」日本風俗史学会学会誌『風俗史学』53号（平成25年）pp.21-44
- 2 村上文芽『近代友禅史』芸艸堂（昭和2年）pp.158-159
- 3 京都市立染織学校編『墨流し染写本』（大正2年）、本写本は、八木徳太郎が自ら墨流し染の技術を記録保存するために京都市立染織学校に依頼し編纂し、別に寄贈用に作成した謄本4部の内の1冊（京都府立総合資料館蔵）である。